

2月、家族参加で行う恒例の社員研修で、タイのプーケットに行ったが、今年は少し寂しい旅行になった。

「妻には申し訳ない」と、咳いた水沢秀夫君の言葉を思い出した。彼は自分がそうは長く生きていられないのを知っていたのだらうか。水沢君は会社の同期で、新会社を設立した時の戦友でもある。彼の先妻は看護師だったが40代の若さで子宮がんを患い亡くなった。忙しくてがん検診を受けなかった先妻に対して（医者の不養生と同じく）がん検診を軽くみたと非難していた。

先妻が他界して、成人式を終えた一人娘から「お父さん、再婚してもいいのよ」と言われても「お前が結婚するまで再婚はできないよ」と応える心優しい父親でもあった。そして、一人娘の結婚が決まって次の年に連れ合いになる人が現れた。先妻を亡くして10年を経てやっと再婚することを決心したのだ。

仕事も順調だし何から何まで上手く行っているように見えた。2年前、社員旅行で奥さんをハワイに連れてきて我々はおのろけ話を聞かされた。相手の女性は50代の初婚の方で心根の優しい人だった。

だが、新しい連れ合いとの幸せな生活は長くは続かなかつた。再婚してから1年目に前立腺がんが見つかったのだ。しかもリンパに転移していた。

医者は彼を見放したが、奥さんの協力であらゆる治療法を試した。中には疑問視さ

AROUND THE WORLD

山師の手帳 第16回 中村繁夫

「希望」こそが毎日を過ごす糧



れる民間療法もあったが、本人にとつては薬にもすがらないで生きることに執着した。ともかく、絶対がんに打ち勝つという執念は人一倍強く、病魔と闘っている気迫を感じた。

時に会社に来るのに奥さんが同行することもあった。日毎に痩せてゆく彼の姿を見ているのも辛かったが、会社に出てくることが彼の生き甲斐だったので温かく見守った。その時も本人は「65歳まで頑張らないと年金が入りませんか」などと冗談を言って周りを笑わせていた。

使命感そのものが希望になる

新しい年が明けても体調は思わしくないようだった。「この際、徹底的に治して1カ月で復帰しますから心配しないで下さい」と言い残して緊急入院をした。それからたった2週間後に彼の計報を出張先のミャンマーで聞いた。最後の最後まで会社に行きたいと話していたと聞いて、彼の存在感の大きさに改めて気がついた。

すでに前立腺がんには罹っていたことを隠して結婚したような結果になったことが「妻には申し訳ない」という言葉になったのだらうと今になって気がついた。余命が1カ月とがん研で宣告されていたら、奥さんと温泉旅行でもしていたかもしれない。しかし、彼は財務部長として折からの円安（15%安）に対し、インパクトローン（外

貨による貸付）の含み損を解消するために寝言までいつていたというので、やはり仕事を優先しただろう。

会社を新創業した時の危機感は大変なものだった。水沢君も、会社を立ち上げたからには継続させる使命があると考えていたはずだ。つまり、使命感そのものが彼の希望だったのではないかと思う。老子の言葉に「不幸は幸福の上に立ち、幸福は不幸の上に横たわる」というものがある。不幸だと思っていたのは、周りだけで本人は幸福だったはずだ。共に会社を立ち上げた者だからこそ、この幸福が分かる気がする。

同じ時期に私も前立腺がんの治療を経験したので分かるが、「希望」さえあれば、人間、自然体で毎日を過ごすことができるものだと思う。水沢君は、希望があったから毎日会社に来たのだ。それががんを克服するという強い信念になって彼を支えていたのだらう。享年63歳の早世であった。②

〔なかむら・しげお〕1947年生まれ。レアメタル専門商社・アドバンストマテリアルジャパン（AMJ）社長。新著に「レアメタルハンター・中村繁夫のあなたの仕事を成功に導く「山師の兵法A to Z」（ウエッジ）。

